

学習会(子ども会)だより10月号 前編
MY SKY 第11号
マイスカイ

1995年10月17日火曜日発行(毎月第2・第4土曜後の火曜日定期発行)

発行者
 板野中学校
 学習会
 編集・文責:吉城正士

今回は、発行予定日よりも前に、みなさんの手元に届いていることだと思います。それは、
 今月の17日に行われる第2回板野中学校同和教育研究大会に備えて、みんなに「私の目を
 見て!」と重ねて考えてほしいことがあるからです。今回の内容をよく読んで、参加して
 みて下さい。

ところでこの「MY SKY」は、みなさんが読んだ後、お家の人に渡して、見てもら
 ってるでしょうか? お家のみなさん! お忙しいでしょうが17日、大勢のみんなと心の洗
 漢に来てみませんか? 私の父母にも、来て一緒に研修をするように話しています。どう
 かみなさんも、できる限り参観において下さい。



ひととして生きる誇りとは? 「水平社宣言」(10月5日:3年第3回全体学習)

10月5日に3年B組・3年全体が「水平社宣言」を資料に全体学習を行いました。この
 宣言文は、全校生徒が必ず校内のどこかで目にしていると思います。そう、北棟の東階
 段を2階から3階に上がるところに掲げてある作品です。

この授業の中での二つのことにふれ、記しておきたいと思います。

まず一つめですが、実は私自身、「水平社宣言」と出会って8年目になるのですが、初
 めの5年間くらいは、宣言文に込められた本当の思いはわかってなかったと思うのです。
 今でも全てはわかっていないと思いますが、それでも少しづつわかるようになってきたよう
 に思います。どうしてそう思えるのか? それは、部落問題に本当に真剣に取り組みだした
 からだと思います。

あまり人には言ったことはありませんが、あの宣言文を声に出して読む度、自分の声が
 大きくなっていくのがわかります。心臓を打つ鼓動が強く、はやくなるのがわかります。
 顔を真っ赤にして読んでいるのがわかります。読む度に目に涙が溢れてくるのがわかりま
 す。そんなふうに変わってきました。けど、最初からそうであったのではありません。読
 む度に、年月を重ねる度にそうなっていました。

だから、「水平社宣言」を目にして間もない人に、同じことを求めるのは難しいように

思うのです。

けど、だからといっていつまでも目にしないわけにはいきません。部落問題学習に取り組んでいく中で、何度も何度も目にして、少しづつ少しづつ、宣言文の中に読み込まれたたくさんの思いを感じとってもらえたたらと思います。

二つめに入る前に、次の文章を読んでみて下さい。

…… 略 …… 私も結婚適齢期を過ぎ、実家に帰ると度々結婚の話題がでる。

そんな時、近所の幼なじみの話題がでた。

親：「あそこも結婚近いんとちがうで」

私：「へーほんま」

親：「聞き合わせに来よるらしいじょ」

「聞き合わせ」という言葉に私は敏感に反応した。今までにも聞き、当然知っていた言葉であるが、なぜかその時は、異常なほど反応した。

私：「うちに聞き合わせに来て、ほの人がいい人やと思うたらなんて言うん？」

親：「ほら、いい人って言うわよ」

私：「ほな悪い人やと思うたらなんて言うん？」

親：「ほら、普通の人って言うわよ」

私：「ほんなんって変なん違うん？」

私には、誰が聞き合わせなどということをするのかはわからないが、やはり聞き合わせをする以上、疑いながら調べているような気がする。その中で、「いい人」と言われば疑いもしないだろうが、「普通の人」と言われると、少なからず疑いをもつのが世の常でないだろうかと思う。そうやって聞き合わせに答える方は、結局その人物を深く知りもしないで、勝手にその人物を売っているのではないかと思う。

釣り書の話題もでた。親は言う。

親：「結婚は、お互いが不幸にならんためにも、つりあいが大事なんですよ。ほなけん

釣り書はいるんですよ」

私：「家のつりあいっていつたい何なんなんだ」

親：「何を訳のわからんこと言よん、ほんなん世間一般でいう社会通念でえ」

私：「ほな、世間って何な。世間て母ちゃん自身でないんかだ。自分自身が世間でいう盾の後ろに隠れとるだけでないか！」

この時すでに、私の腹立たしさは頂点を突き抜け、怒りとなっていた。この後、こ

ういう言葉も吐き捨てられた。

「まだまだ青いな」「おまはん（同和教育に）のめりこんどん違うん」
今でもこの言葉だけは忘れられない。思い出しただけでも、腑はらわたが煮えくり返るような思いになる。その場でできる限りの抵抗はしたつもりであるが、しばらくして私：「もう話とうないけん、話かけんといて」

という言葉を吐いてしまった。その時の実際の気持ちではあるが、後から考えれば『それを乗り越え、冷静に話さねばならないのだろうな』と思う。今の私は、まだそれができないでいる。世の中にはそれを説得し、乗り越え、結婚をした人が数多くいる。その人たちの苦勞が、今やっと偲ばれてくる。今のままではいかんと思う。自分自身をよりいっそう鍛えていかねばと痛感する。見合いをせざるを得ない自分自身にも腹が立つし、そんな親の紹介しょうかいで相手を選ばざるを得ない自分自身にも腹が立つ。

しかし、やはり親である。憎みきる事はできない。もっと若い頃は「反抗して家を出て、もう帰って来ないでいいようか」とも思ったが、残った末っ子で、年々老いていく両親を見ると、どうしてもそれはできない。幼い時は、休日となれば私一人でも遊びに連れていき、遠足や運動会の時には手作りの弁当を持たせてくれた。高校の時には、足のけがで入院した私にずっと付き添い、看病かんびょうをしてくれた。別に私の家だけでなくどこの家も同じで、親として当然のことかもしれないが、親の情じょうというものをつくづく感じている。そんな両親をどうして放っておけようか……。

.....略.....

拙著「いしづえ」189ページ収録

6時間目は金子先生による全体授業でした。その中で、後半かなりの時間をとって金子先生自身の生活の中に部落問題がどういうふうに生きてきたかを、実体験を元に話してくださいました。

結婚に反対された父母。その結婚式に父方から一人だけ出席した父の兄。父の実家に来た後の、母の辛い思い。そして、母のことを他人に調べられた怒り。また、その時の自身の差別意識……。

そんな内容であったと思います。

そしてこの度の娘さんの結婚。自らの生き方を通して、結婚とはどうあるべきかを悩み、考え、基本的人権を、人間としてのあり方を自分自身に問いただす。娘を信じ、彼を信じ、二人の新しい門出を心から祝おうとする気持ちが、私の胸に響いてきました。

その授業の終わりの方で金子先生が話していた言葉を、今、活字にして残しておきたい

と思います。

自分自身ふらふらしました。娘の結婚の時にはね。周りのみんなから言われるよう^{まわ}に「調べた方がいいのかな？」って。親として「『考えた方がいいの違う？』って娘に言うた方がええんかな？」ってぐらぐらぐらぐらしました。

はればれ だけど今、晴々してゐるんです。良かったって。私は自分に嘘つかんと、正直に^{うそ}^{じょうじき}「人間としてこうあるべきだ」っていう母親でおれたって、私は思うとんです。

私はもっともっと自分を母親として磨きたいし、先生として磨きたいし、みんなと人間対人間でつながる授業したいし、間違うた人間でありたくないって。それだけは思うとんです。

また明日から、音楽の授業の中で、もう一つ強い、ぐらぐらせんような、そんな自分を作るべく、みんなと授業の中で、音の心、音の心を求めていきたいなって、思うんです。

この時の授業について、「先生の話が長かった」といった感想があるようです。しかし、私はそれでも良かったと思っています。なぜなら、あの話は「水平社宣言」にぴったり重なってくるからです。その重なる部分というのは「人としての誇り」です。

では、誇りうる生き方とはどういう生き方か？それは、人が人を虐めない生き方。人が人を^{さげす}蔑まない生き方。人が人を差別しない生き方だと思うんです。

人は、正しいと分かっていても、なかなかそれを貫き通すことができません。しかし、それができないということは自分に嘘つき、人としての誇りを一つ一つ捨てていくことだと思うんです。そのことを「水平社宣言」に金子先生の思いを重ね、もう一度考えてみて下さい。

そして、これらのもつ意味は、そっくりそのまま「私の目をみて！」につながってくるようにも思えます。17日に向けて、そんな見方でも学習を積み重ねてみてはどうでしょうか。

最後に、この授業の感想を一つだけ紹介させてもらいたいと思います。

「水平社宣言」を学んでの感想は、はっきり言って難しそうなことです。^{むずか}理解力のない私には1週間や2週間でのみこめるような内容じゃないと思います。

けど、そんな私でも思うことがあります。強く思うことがあります。それは部落の人たちは凄くひどい目にあっていたんだということです。「特殊」と言われるほどの差別を受けてきたんだ……と、この宣言文を読んで鳥肌が立つくくらい身体にゾクッとくる

ものを感じました。今は本当に、そんな悲しさと怒りしかありません。

水平社宣言を書いた人、部落の人は本当に強い人間だと思います。私たちに伝えたかったことは、宣言文の数百倍の量だったと思います。それだけの怒りや悲しみがあるのに、仕返しをしてやろうと思う気持ちじゃなくって、最後に「人間に光あれ」って、部落だけ、部落外だけじゃなく、どちらもが一緒になって輝き続けていける、そうしていこうと訴えているところが、本当に本当に、本当の本当に「誇り」をもって生きてるなって思いました。

私は本当にまだまだです。けど焦らずに、焦っても転ぶだけなので、マイペースで（みんなを巻き添えにしながら？）けど、それでも歩いていきたいです。 3年女子



◎自分の足元を見つめていますか?

れい　あしもと　み ネシカミとおくなる

私の家から学校までゆっくり歩いて十五分。生徒たちの一番登校の多い頃をみはからって、家を出ます。大半は自転車通学で、次々と私を追いかけていく後から、一人ずつ、「お早よう」と声をかけるのです。時には、一列に並んだ自転車が十台、十五台と続くことがあります。それでも一人ずつ十回、十五回連続して、声をかけていくのです。

まいあさ 毎朝そのことを繰り返していくうちに、いつの頃からか、私の背中で声がするようになります。「お早ようございます」とさわやかな声をかけながら、走り過ぎていきます。それにまた、「お早よう」とこたえていくのです。

野球部の生徒たちは、特に、よく挨拶あいさつをしてくれます。朝でも昼でも夕方でも「こんちは」です。私もおなじように「こんちは」と言葉を返してやるのです。

六月のある日の放課後、グランドに沿った下校道を歩きながら見ると、生徒たちはグランドいっぱいになって運動していました。ふと、遠くの方で帽子をとっておじぎをしている生徒が目にはいりました。練習中私の姿をみつけたのでしょう。礼をすると、また走り出しました。私が気づいていようがいまいが、その生徒にとってはどうでもよい様ように見えました。それが誰であるかはっきりしないのですが、私は大きな声で、手を振りながら「サヨーナラ」と言ってやりました。すると、グランドにいる生徒たちが一齊いつせいに私を見て、手をふってくれました。

それから数日後の生徒集会で「心ゆたかになれば、礼が遠くなる」と話をしたら、その日の放課後が大変でした。部活動をしている野球、ソフト、サッカー、陸上の生徒たちが私の姿を見つけては頭を下げ、見つけては頭を下げるのです。女子ソフト部の生徒たちは、ごていねいに声をそろえて「校長先生、サヨーナラ」とやるのです。私の帰りを待ちかねていたかのように、茶目っ気なところをチョッピリ見せて、親愛の情を寄せてくれるのです。

一中生はおじぎをしないという、他校の先生方の悪評は、この頃になると消えてしまって、学校にみえる誰からも「よく挨拶のできる生徒たち」とほめていただくようになりました。「どうして、このように……」とたずねられた時、「いや別に……親しみをこめて声をかけていただけです」と答えるほかありませんでした。

私が一人ひとりの生徒に声をかけていったのは、単に「あいさつのできる生徒」をつくることではなかったのです。いつも黒崎学級の生徒たちへの思いがありました。生徒一人ひとりと私とが共感の「絆」で結ばれたとき、はじめて黒崎学級のことを生徒たちに話すことができる、という思いがありました。生徒たちと私が同じ人間として、対等に話し合える状況がなければ、黒崎学級の悲しみがわかってもらえる土台もないのです。挨拶とは人間への尊敬であり、信頼と愛情なのですから——。

だから、私が生徒より先に声をかけたって、おかしくはない。お互いがお互いを尊敬するから、挨拶がかわし合えるのです。

「校長先生の言うことは間違いない」と、生徒たちに信頼される日まで、私は、自らを生徒たちの前にさらしながら、自らを高めていかねばならぬと思ってきました。

(佐藤文彦著「人間の生き方と同和教育」158ページ収録)

私はサッカーチームの監督をしていますが、毎年部員にあいさつや会釈のことについて話をします。昔はただただ「あいさつや会釈は絶対にしろ！」と言っていたと思います。しかし、同和教育をしていく中で、その言い方は変わってきました。それは、私自身の考え方があわってきたからです。

あいさつや会釈は、どうしてするのでしょうか？それは、相手を人間として本当に尊敬できるからするものだと思うんです。もしそういう気持ちがなくてあいさつや会釈をするのなら、それは形だけの、実のない練習をしているようなものです。そんな形だけの練習をするくらいなら、しない方がましです。実のない練習はかえって悪い癖をつけているようなものですから。「この子がいてよかったです」「この子がいるから今の自分があるんだ」

と思えば、自然とあいさつや会釈はできていくものだと思うんです。そこには、大人とか子どもとか、先生とか生徒なんていう区別^{くべつ}はなくなってくると思うんです。だから、先生の方から先にあいさつや会釈をしてもいいと思うんですね。

同和教育は命を大切にする教育です。友達の命も、自分の命もです。そして、その互いがより良くなっていくためには、単なる仲良しでなく、厳しさをも持った関係が必要になってくると思うんです。

私は学級担任を持っていたとき、必ずと言っていいほど、クラスの生徒たちに言ってきたことがあります。それは「本当に同和教育が体の芯にしみこんでいれば、あいさつや会釈もできる。登下校だってきちんとできる。係活動^{かかわりかつどう}だって、部活動^{ぶかつどう}だって清掃^{せいそう}だってしっかりがんばれる。もちろん、勉強^{めうきょう}だって一生懸命にできる。そんなクラスには、絶対にイジメなんかは起こらない。けど、もしそれができないのなら、まだまだ同和教育が足りない証拠^{しようご}。」という言葉です。

私たちは、部落問題学習を全体学習という場でやってきています。しかし、実際にみなさんの、私たちの生活はどうでしょうか？それが生活に生きているでしょうか？人によって生きている人、生きてない人があるのではないかでしょうか。また、一つのことには生かせてるけど、別のことには生かせていないということがあるのではないかでしょうか。それでは、今私たちががんばろうとしている学習がもったいないですね。歯車^{はぐるま}が噛み合わず、空舞^{からまい}しているようなものなのですから。

しかし、その全てを一人ひとりが自分の力でやってしまうのはなかなか難しいものです。けど、だからこそ友達^{そんざい}の存在が大切になってくるんですよね。そんな、お互いを高め合っていけるような関係を、今のうちから確かなものへとしていきたいものです。

さて、みなさんの中ではどのくらい同和教育が生きていますか？



①ここで一発飛び入りクイズ!! のコーナー

1. 次の漢字は、何と読むでしょうか？

欠伸 硝子 牡蠣 海豚 無花果 流石 蒲公英 氷柱

2. 3月のある1週間（日～土）の日にちを合計すると、140でした。

では、その年の8月16日は何曜日？

3. 「堀」という漢字の中には「女」という漢字が含まれています。

さて、この漢字の作りにはどういう意味が隠されているでしょうか？

By T氏提供



◇ ◇ これから日程 ◇ ◇ ◇

にってい

本当は本号の冒頭に載せたかったことを、ここで書いておきたいと思います。

かじつ 過日、一人の生徒が1冊の絵本を持ってきました。題は「ぼくを探しに」（原題『The Missing Piece』倉橋由美子訳：講談社発行）というものです。シェル・シルヴァスティンというアメリカ人が書いた絵本です。ですから、当然部落差別について書かれたものではありません。

じつ 実は半年より少し前にも、ある卒業生がそのアーティストの書いた「おおきな木」（原題『The Giving Tree』本田錦一郎訳：篠崎書林発行）という別の本を持ってきました。どちらとも、3分もあればひととおり目の通せる絵本です。しかし、これら絵本の持つ意味は大きく、子どもから大人までを充分に考えさせ、悩ませてくれるものだと思います。是非とも気軽な気持ちで手にしてもらいたいと思い、ここに紹介させてもらいました。

かいつ ちなみに、絵本の中の解説で、解説者がエーリッヒ・フロムの「愛するということ」（原題『The Art of Loving』）から次の二文を引用しています。

「愛とは第一に与えることであつて、受けることではない」

ひとお せっかくの機会なので、もう一押しさせて下さい。エーリッヒ・フロムの言葉にふれた、一つの文章です。

苦しみのない愛はない

じんせい 人生というステージには、思いがけず、ポツカリ穴があくことがある。小さい穴、大きい穴、病気、事業の失敗、裏切り、生別、死別、失恋。

いきお 穴があけば、勢いステージは狭くなり、それが気にかかり、不自由を強いられるそこで、穴の存在を呪うのも一つの生き方なら、穴を避け、無視して生きるのも一つの生き方だろう。しかしながら、もう一つの生き方、すなわち、その事実を素直に受け入れて穴があく前には見えなかつたものを、穴があいたゆえに見ようとして生きる

ことも可能でなかろうか。

こんな話を、浅野順一著、「ヨブ記—その今日的意義」をもとに、大学4年生たちに話したことがあった。

それから数ヶ月たって一人の学生が、授業の後話しに来た。この人は、夏休み中に婦人科系統の手術を受けた結果、子どもが生めなくなるかもしれないと医者に言われたというのである。

「目の前が真っ暗になりました。というのは私には結婚を約束している人がいて、その人は子どもが大好きなんです。

思い切って打ち明けました。そしたらその人が、僕は『君』と結婚するので、子どもが生めるかどうかと結婚するんじゃないよって言ってくれたんです。

一時は、穴があいた事でとても苦しんだけれど、その穴のおかげで、相手の人の深い愛にふれることができたように思います」

その頃には、学生の目は涙でいっぱいになっていた。

かわいそうに……、よくぞここまで到達してくれたと思いながら、穴の存在することに変わりないこれから日々の闘いを思って、心が痛むのだった。

その男の人を私は知らないけれど、多分、親、兄弟、周囲の反対もあるだろうに、それも構わないという。

これから何年か先、いよいよ子どもが生めないことがわかって、しかも、自分の同僚たちが子どもの話をするような時に、その人に後悔めいた気持ちは湧かないと言いいきれるだろうか。

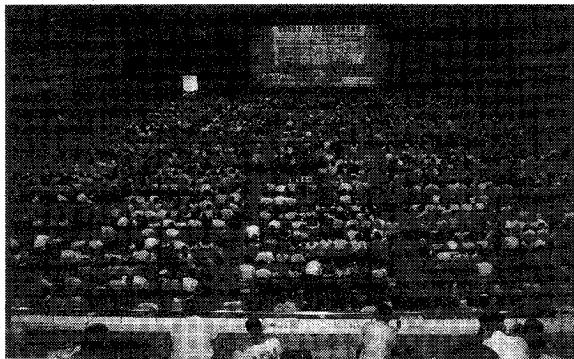
エーリッヒ・フロムが、「愛するということは、単なる強い感情ではない。それは決意であり、判断であり、約束である」と言っていることを、しみじみかみしめるのであった。

学生たちにこの「持続する愛」とでも呼ぶものを育ててゆきたいと思う。それは対象が持っている表面的なすばらしさに魅せられておのずとほとばしる感情ではなくて、むしろ自分の内面生活からにじみ出るようなものであり、地味な、時には、しぼり出すようなものではないだろうか。

苦しみのない愛はない。その苦しみを美化することなく、味わいつくす時、苦しみをさえ愛することができるようになるのだ。



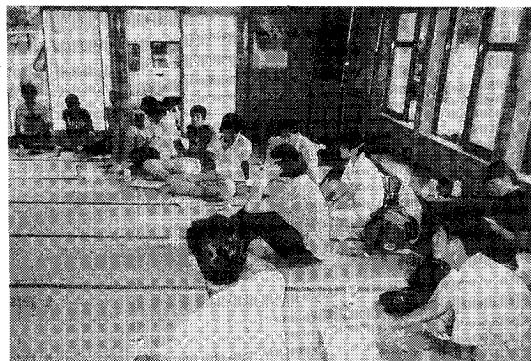
- ★10月14日(土) 部落解放中学生学習交流会 (1:30～板野町総合センター)
- ★10月17日(火) 2年B組全校全体学習(第2回板野中学校同和教育研究大会)「私の目をて！」
- ☆10月20日(金)～22日(日) 板野郡秋季新人体育大会
- ☆10月26日(木)・27日(金) 2学期中間テスト
- ★10月31日(火) 板野郡同和教育研究大会(上板中学校)
- ★11月1日(水) 板野町同和教育研究会(板野南小学校)
- ★11月2日(木) 3年C組3年全体学習



全国部落解放高校生授学生集会
(8月3日：高知県)



3年第3回全体学習(10月5日)



学習会一泊研修
(8月8日：あいあいランド)